

# 新春対談



宮城県南三陸町長  
Jin Sato  
佐藤 仁さん

●佐藤仁さんのプロフィール  
昭和26年（1951）12月24日、南三陸町志津川生まれ、56歳。  
仙台商業高等学校卒業。  
平成4年2月から志津川町議会議員、平成14年3月から平成17年9月  
まで志津川町長を務める。  
平成17年11月、旧歌津町と合併した南三陸町の初代町長。

風間市長の3回目となる「新春対談」のお相手は、平成17年10月1日に志津川町と歌津町が合併して誕生した「南三陸町」の佐藤仁町長です。

南三陸町は、本市から高速道を乗り継いで約2時間のところにある、太平洋の豊かな恵みをもたらすリアスの海と、その恵みを支える山に囲まれた風光明媚な養殖漁業と観光の町です。

その初代町長であります佐藤町長と風間市長は、3年前の東京での要望活動で知り合い、親交を深めていくうちに、互いのまちの交流人口を増やせなだろうかと思われ、昨年、互いの職員同士の交流を行い、観光やまちづくりについて情報交換を行いました。

今年は、さまざまな機会を利用した海と山の恵みを基にした交流事業への発展が期待されます。これからの交流やお互いのまちづくりへの協力などについてお話を伺いました。

## 今あるものでの交流

風間：今日は大変お忙しい中ありがとうございます。南三陸町の町長さんとはよくご縁がございまして、白石にはない海をお持ちの佐藤町長と対談させていただきたく思います。お互い交流人口の増加が大きな課題でしょうか、これから南三陸町と何か交流ができればいいかなと思っております。

佐藤：私も昔スキーなどで、蔵王にもたびたびお邪魔していただんですが、スキー場や温泉があるのが大変うらやましいなと思っております。白石市は、うちの町にないものを持っていて、白石市との交流はお互いにはないものを補完し合いながらやっていけるということから、大変良い組み合わせなのかなと思っております。

風間：そうですね。お互いがないものを分かち合えますからね。南三陸町まではちょうど2時間で、小旅行としては最高です。

そして、何よりこちらの魅力は、「体験型の南三陸時間旅行」というものをつくっていることです。白石の市民が100種類以上の体験型観光をしながら宿泊したり、日帰りの海水浴をしたりと、夏は大いにこちらで遊び、おいしいものを食べられればと思います。お互いにあるものを、お金をかけずになんとか自然のままの交流が

きないかと思っております。今年はお互いの住民の皆さんが「海彦山彦の体験型交流プラン」でもできないかなと考えています。でも、「南三陸時間旅行」というキャッチフレーズの付け方がうまいなあと思っております。

佐藤：南三陸時間旅行ということで、知恵を絞りながらつくりました。昨年7月に白石にお伺いした時、三陸自動車道が津山インターまで供用開始されており、実質2時間かからなかったことに驚きました。そういうことでは、とても近い市だなどという感覚があります。ところで、白石城を博物館にしなかったことは素晴らしいなと思っておりました。それから、白石城から下っていくとお堀があつて、その周りを散策すると緑もきれいで、武家屋敷などの昔の町並みの雰囲気もあつて、お堀をゆっくりのんびり歩いてみると、白石の歴史と文化に心を癒やされる、そういうまちだと感じました。

それから、私は商売が印刷業なものですから、紙というものにこだわりがあります。紙というものにこだわりの職員から手すきの和紙の名刺をいただきました。名刺交換というのはこれからどう話をするかという入り口の部分ですから、私も海藻名刺を持っていましたが、「白石の和紙で作った名刺」というのは良いですね。」という



▲約2時間で南三陸の美しい海が迎えてくれます

ことで話に入っていくやすいなと思えました。白石和紙は全国的に有名ですから、利用の仕方はこれからいろいろと考えられるのかなと思います。

風間：そうですね。白石には「白石三白」と言われて、三つの白いものがあります。一つは白石和紙、白石温麺、そして今はくず粉なんです。それぞれで頑張っています。今あるものをどう生かすかということがお互いの課題だと思います。

佐藤：そうですね。ないものねだりというか、どちらかというと私たち行政は、今あるものをどう細工するかを考えなければならぬのですが、どうしてもないものねだりをしてしまいますね。自分たちが持っているお互いの地域資源は、いっぱいあるんですから、耕し

て良いもの見つけて、それを磨いていくことがとても大事なかなと思っております。風間：町長が言うように、あるものを利用することのほかに、私は市民にそれぞれ好きな場所を見つけてほしいと思うんです。つい、東京や仙台と比べて「何もない」と言ってしまうがちです。しかし、ないものねだりをするのではなく、自分のまちの良いところをアピールしていくことが大切だと思います。南三陸町には、海や山の素晴らしい財産がありますね。以前、ツツジがたくさん植えられた田東山に登りましたが、ツツジも素晴らしいのですが、そこから見るリアス式海岸の素晴らしさはすごいですね。学校の教科書で学ぶより、田東山から見れば一目瞭然、「これがリアス式海岸だよ」と分かります。

## まちのセールスポイント

佐藤：確かに普段生活しているもの、自分たちのまちの良さというものが分らないですね。私たちのまちでは、「ブランド塾」を立ち上げて、12人の塾生が自分たちのまちの良さをあらためて再発見し、観光地としてのブランド化と特産品のブランド化をやってみようとしています。それとも一つ、ブランド塾とうまくタイアップで



▲田東山から見た三陸のリアス式海岸。絶景です！

きたのが、仙台・宮城デスティネーションキャンペーンです。このDCが始まった時にちょうどブランド塾をやっていたことが非常にプラスになりました。例えば、キャッチフレーズの「汐風を食べてみませんか」はブランド塾で考えたんです。「汐風」の「汐」の一字も、「潮」にしようか「汐」にしようか悩んだのですが、やはりこの「しおかせ」は「汐」の方がピッタリだなと決めました。ロケーションもそうですが、地場の

食材も含めてのキャッチフレーズになったと思います。南三陸町ではこれで今ほとんど売り出しています。風間：うちのキャッチフレーズが「うめえだ白石」なんです。「うめえだ」の中には、「食べておいしい」、「上手である」、「素晴らしい技術」という意味があります。そして、若手の実行委員会が中心となって実施しています。また、うちは今「賑わいづくり研究会」というのを、若手の皆さんで作ってもらって、前に出した「仇討ちシリーズ」を考え出したんです。佐藤：あれは面白いですね。まちづくりは面白いことだめなんですよ。風間：白石が持っている歴史を生かしているのが、仇討ちシリーズなんです。『宮城野信夫』という仇討ち物語が白石にはあつて、それを題材にして、「敵をとる」という仇討ちではなく、「成就する」、「願いを込めたものが成功する」という意味での仇討ちシリーズで、辛いというコンセプトで作っています。そして、みんなが楽しみながら4種類の商品が販売されています。まんじゅう、みそ、クッキー、ドーナツです。

また、青年会議所では、



▲仙台・宮城デスティネーションキャンペーンポスター

偉人伝という漫画読本を8冊発行していますが、そのうち仇討ちに関するものは孝子堂という所に、18代横綱の大砲万右衛門については白石城の銅像の所に、箱を作っている漫画を読めるようにと漫画読本を置いてあるんです。今後は、片平観平や片倉小十郎なども考えています。まちを自分たちで再発見しながら自分たちで楽しくやっています。最近では、「軽トラ市」が始まりました。軽トラに自分たちが栽培した野菜などを乗せて、荷台をお店として現在10台が出店し